北海道体育学研究　54：53－61，2019

研究ノート

サッカーにおける技術・戦術的特質に関する研究
―オフサイドを中心として―

佐　藤　亮　平[1]，近　藤　雄一郎[2]

Research on technical and tactical characteristics in soccer
―Focusing on offside―

Ryohei Sato [1]，Yuichiro Kondo [2]

Abstract

In this study,we tried to reference to the culture that is the problems of tactical learning in physical education from the concept of “technical characteristics” which has been proposed by the School Physical Education Research Association.In order to join tactics with the current teaching methods that have become mainstream, we proceeded to think about the “technical / tactical characteristics” in which the concept of tactics was incorporated into “technical characteristics”. Then, in order to examine “technological and tactical characteristics”, we focused on the research that mentions the fun and enjoyment of soccer, and examined its achievements and problems.As a result,it was considered that the offside line had the uniqueness of football. The offside line is not visible and is defined by a virtual line, which varies with the position of the ball or the defender.Therefore, it was thought that the playing field on which performance was expressed had a dynamic nature.In addition, it is performed in the play field involves the complexity that many elements are intertwined in a complicated manner by the creative expansion of space-time by the attacker and the reduction by the defensive side.Also in this respect, it was thought that the unique fun and enjoyment of football existed. Based on the above examination,in this research, “technical and tactical characteristics” of football are “made to keep fighting in a complex manner in the play field defined by the virtual line of offside”.

key words: Soccer, offside, tactics, Techniques

１．緒　　言

球技領域は何を指導するのか．この問いについては，日々，様々な角度から研究が進められている．とはいえ，現在の所，体育授業の指導する中身に影響を与える『学習指導要領』では，技術だけではなく戦術的な動きが指導対象とされている．この傾向は2017年３月に改訂された『学習指導要領』にも反映されている．また，今回の改訂では「主体的・対話的で深い学び」という学び方についての言及もみられ，学習者が主体的かつ対話的に学ぶことが可能となる中身の精選が必要となると思われる．このような動向がある中で，球技領域は，前改訂から引き続き戦術の学習が重視されている．この戦術を学習の主題とすることは，高橋（2010）が指摘するように，

１．尚絅大学短期大学部
〒861-8538　熊本県菊池郡菊陽町武蔵ケ丘北２-８-１
２．福井大学
〒910-8507　福井県福井市文京３-９-１

著者連絡先　佐藤亮平
sato.ryohei.0317@hotmail.co.jp

１．Shokei University junior college
Kita2-8-1, Musasigaoka, Kikuchigun, kumamoto 861-8538
２．School of Education, Fukui University
Bunkyo3-9-1, Fukuishi, Fkui 910-8507

イギリスやアメリカで行われていた戦術学習論の影響を受けている．それは球技領域に属する種目を「型」に分類して記述していることから窺える．

しかし，球技領域における戦術学習論を展開するにあたっては，「球技領域では何を学習者に指導するのか」の前提としてある，「体育は何を教える教科か」という教科存立の基盤ともいうべき問いを改めて明確化する必要があるように思われる．前述した戦術学習論では球技領域の学習において戦術を指導する重要性を示している一方，それぞれの球技が有するスポーツ文化としての面白さや楽しさについて十分に言及しておらず，学習者がスポーツについて学ぶ意義が明確化できていない状況にある．このような現状があるにも関わらず，近年の研究動向として戦術学習に関する研究が勃興するのは，その有用性が認められているからであろう．以上のように戦術学習論の展開について批判的に見てきたが，本稿は戦術学習論の有用性を否定するのではなく，その有用性をさらに高めるべく，「体育が何を学ぶ教科なのかという問い」を踏まえた上で，球技領域の中身を創り出すために必要なことが何かということを改めて問うのである．

さて，前述してきたように体育は何を学ぶ教科かということを見直してみると，多様な見解がありながらも，ひとつの共通点を得ることができる．それは，日本や欧米の体育における目的・目標論が多様化する原因が「体育が存立する文化的基盤をどのようなコモンファクターで理解するかという立場の相違（傍点，筆者）」にあるという高橋（1997）の言葉にみられる．この高橋（1997）の「文化的基盤」という言葉に着目すれば，体育の目的・目標論には多様な立場や考え方はあるものの，教科として成立する背景には文化を基盤としていることが共通していると理解できる．こうした見解からも窺えるように，体育が文化を学ぶことを基盤とする教科ならば，その体系を踏まえた上で，指導する内容を検討する必要があると考えられる．とはいえ，文化の体系を如何にして検討し，そこから教える内容を導き出すのか．この問題に対し，学校体育研究同志会（1974）が提唱する「技術的特質」という概念は，その道筋を提供してくれる．「技術的特質」とは，「それぞれの運動文化が持っている『面白さや持ち味』ということ」であり，「他の種目（教材）にないその種目独自の技術的な特性（本質）」とされる（学校体育研究同志会，1974）．つまり，指導対象となるスポーツの「技術的特質」を捉えることは，スポーツという文化を学ぶ意義を見出すことを可能とする．また学校体育研究同志会（1974）によれば，この「技術的特質」を捉えない限り，スポーツを「指導していくことは不可能に近い」ともされる．草深（1977）が言うように，学校体育研究同志会は「『喜び』をひきおこす運動技術の質について，運動文化の中核的存在である“技術の内在的特性”から規定し，その基本単位を明らかにしてきた」ことからも，この概念の射程が単にスポーツの特徴を捉えることを意味していないことが理解できる．この「技術的特質」が示すのは，全ての人が運動をできるようになり，わかるようになるためには，文化そのものを学習するのではなく，そこにある科学的な内容を取り出し学習する必要性である．こうした学校体育研究同志会（1974）の論に即して現状をみれば，対象となるスポーツの面白さや楽しさを捉えることなくして，スポーツを学習の対象とすることはできないということになる．

ところで，1958年に『学習指導要領』が告示されて以降，球技領域には様々な種目が例示され，その中にサッカーも含まれていた．これを一つの契機として，学校体育におけるサッカー指導に関わる研究も盛んに進められるようになる．佐藤・近藤（2015）の研究では，サッカーの指導方法は技術を主体とするものから技術と戦術の両方を学習の対象とするものへと変化してきたことを報告している．また，研究対象としたサッカー指導に関する研究における教育内容の抽出方法として，「学習指導要領に準じるものや，学習者の実態から位置づけているものが主となって」おり，学習の対象となる技術や戦術の検討が十分になされていないだけではなく，サッカーの文化そのものを分析すること無く，教材の開発や授業実践が進められている現状が明らかとなった（佐藤・近藤，2015）．体育授業におけるサッカーの学習が学習者にスポーツ文化としての科学的認識を形成する責任のあるものだと考えるならば，その文化について教える側は理解し，その中から学ぶに足る内容を抽出する必要があろう．しかしながら，現状では『学習指導要領』に記載されている内容をいかに子どもたちに教えるかという方法ばかりに焦点が当てられ，その学びがサッカー文化においてどのような位置づけなのかが不鮮明となっている．これは，先に見てきた体育の在り方を充たした指導と呼べるのか．具体的に言えば，文化に基盤をおいた指導となっているのかという問題がある．この問題の背景には，２つの課題がある．

１つはサッカーの発展と戦術の難解さの増幅である．特に近年は新たな戦術的創造が起こり，その変化は急速に進んでいる．2008年以降，サッカーは空間とボールの支配の両方を目指す「システム」を構築し始めた．スペイン代表のワールドカップ優勝，２度のヨーロッパ選手権優勝によって，その流れは世界に波及し，戦術進化の針路が決められた．つまり，攻撃と守備とを分節して捉える流れから攻守を一体化する方向へと舵が切られた（財団法人日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2008，2010，2012，2014）．それに伴い，フィールドとボールを同時に支配する「システム」が導入されてきたのである．とはいえ，「システム」だけが試合を全て決めるわけではない．この点については，サッカーの試合における複雑性をどう扱うのかということが，近年，議論され始めていることからも窺える．このように，近年のサッカーは複雑さをも含めた形で戦術を創造しよう

と試みている．

そして，もう１つの課題が，文化の指導と技術・戦術の指導がいかにして関わっているのかという点である．本研究では「技術的特質」という概念を持ち出すことでこの課題を乗り越えられると考えている．なぜなら,「技術的特質」が「他の種目（教材）にないその種目独自の技術的な特性（本質）」とされているからである．すなわち，指導対象となるスポーツの「技術的特質」を見出すことで，その文化独自の内容を学習することができ，その技術を起点に文化を理解することが可能となる．この点に，文化と技術・戦術をつなぐ結び目を見出せる．そして，この特質を捉えたサッカー指導を構想することは，現代の戦術学習論の有用性をさらに高めることにもつながり，学習者がサッカーをわかり，できるようになる指導の一助にもなるだろう．

このように，文化と技術・戦術指導をつなぐ「技術的特質」を明らかにする必要性について述べてきたが，サッカーの「技術的特質」は学校体育研究同志会（1975）によって球技全体に関わるものとして「２人によるコンビネーションを含むシュート」と規定されて以降，様々な内容が提起されてきた[1)]．これらの規定の変化には，そのスポーツが持つ面白さや楽しさを多くの人が理解し，その文化に関する科学的認識を学習者に形成することが目指されていることと関係があるだろう．しかしながら，現状ではサッカーの「技術的特質」を提起するにためには２つの課題を乗り越える必要がある．その主要な問題の１つ目が文化の発展に関わる新たな概念の出現とその融合である．学校体育研究同志会（1974）は，文化の特徴を「技術」と表現してきたが，実際の規定には「コンビネーション」に関する言及があり，現代的に言えば「戦術」の概念が含まれている．つまり，従来の規定では技術と戦術が同居している状況にあり，指導内容との関連性をもつ概念であると考えると，概念整理が不十分といえる．戦術を体系的にまとめたG.シュティラーの論文が日本に紹介されたのが1980年であることを考慮したとしても，この点には改善の余地がある．なぜなら，この「技術的特質」はサッカーの指導内容と関連しているからである．もう一つは，競争課題が明確に把握されていないという問題である．つまり，サッカーは得点という形式的な面以外に何を競っているのかが，曖昧なまま議論されている．こういった形式的な面以外にも，サッカー固有の技術が形成される背景にある競技規則による影響も見逃せない．特にサッカーの代表的なルールのひとつであるオフサイドが戦術や技術の形成に及ぼした影響は無視できないだろう．攻撃側にとっては，ゴール前で味方選手のパスを待ち伏せする行為を禁止したオフサイドは，その性質上，サッカーの攻撃や守備の発展に与えた影響があると思われる．こうしたサッカーに固有のルールも射程に入れた「競争課題」の把握が文化としてのサッカーを明らかにしていくために必要となるだろう．この２点がサッカーの面白さや楽しさを提起する上で，整理される必要がある．

以上のことから，本研究では従来の「技術的特質」の意味内容を整理し，そこに戦術を取り入れた「技術・戦術的特質」として，サッカーの独自性に基づく面白さや楽しさについて提起することを研究目的とする．

なお，本研究が用いている「技術」,「戦術」,「文化」という用語は，多様な意味内容を含むものであるゆえ，その混同を避けるため，以下の定義に即して用いる．

まず,「文化」については，浅田（1991）によればスポーツ文化とは，スポーツ種目の様式やそれぞれのルールや技術，実行者の行為，その体験を記述した文献や作品，用具や施設，スポーツ文化について第三者が創作した作品であるとされる．本研究でも浅田（1991）が述べるような意味内容を含意するものとして「文化」という言葉を用いてみたい．

「技術」については，クルト・マイネル（1981）による「ある一定のスポーツの課題をもっともよく解決していくために，実践の中で発生し，検証された仕方」であり，その解決の仕方は「競技規則の枠内で，合目的的な，できるだけ経済的な仕方によって高いスポーツの達成」を得るものという意味内容を持つものとして用いる．

「戦術」については，軍事科学における「戦法」,「戦略」,「作戦」,「戦術」という用語をスポーツに援用したシュティーラー（1980）が「戦術」研究の祖となるだろう．本研究では，これらの概念を球技に援用してきたデーブラー（1985）による「戦術」を用いてみたい．デーブラー（1985）によれば,「システム」から順に「チーム戦術」,「グループ戦術」,「個人戦術」と，それぞれの用語には把握される階層によって意味内容が異なる．本研究でも「戦術」という用語が階層性をもつものとして理解した上で研究を進める．

２．研究方法

本研究では学校体育研究同志会が提唱している「技術的特質」を戦術的な要素を含むものとして提案することを目的としている．そのため，その大本となる「技術的特質」が何を対象として規定された概念であるかについて整理する必要がある．つまり，技術が何を意味しているのかについて検討する．そこで得られた内容を基にサッカーの技術や戦術を分析する視座を得る．

次に，学校体育研究同志会（1974）が提唱している球技の「技術的特質」に対し，批判的に検討を行いサッカーの技術的特質を提起している伊藤・竹田（2008），佐藤・近藤（2016）の研究を対象として設定する．そして，技術的特質を導出する過程について検討し，その成果と課題を把握する．

加えて，体育科教育学においてサッカーを構造的に分析し，独自の指導法を提唱している鈴木ほか（2003,

2010）の研究も併せて検討対象とする．鈴木ほか（2003, 2010）は防御の境界面を分析することによって，球技の分類を行っている．そのため，この研究が示した研究成果を検討することによって，サッカーと他の球技を分けることが可能となる．

以上のような検討を通して，サッカーの「技術的・戦術的特質」の再提起を試みる．

３．結　　果

３－１．学校体育研究同志会が提唱した「技術的特質」の概念

学校体育研究同志会は，戦後の体力主義的体育観を批判的に捉えている．友添（2010）によると体育科の目標は1958年に改訂から1968年改訂の『学習指導要領』まで，体力づくりを目標として定めていたとされる．このような目標が体育で設定されたということは，体育の教科内容が体力を向上させるために用いられていたことを意味する．現在の教科教育では文化に関する科学的認識を学習者に形成していくことが教科成立の背景にある．この点からみれば，当時の体力主義とも呼べる体育の教科観は，学習者に何の認識を形成するのかが曖昧になっている．そこで学校体育研究同志会は，改めて体育が何を学習者に教育する教科なのかを問い，その一つとして運動文化に関わる科学的認識の形成を位置づけている．戦後，体育科では戦中の軍国主義体育を猛省し，体育が何を教える教科であるのかを問うてきた．その中では様々な議論がなされてきたが，学校体育研究同志会はその発起人となる丹下保夫が提唱した運動文化論を軸に据えた体育の指導方法を模索してきた．その到達点が運動文化を児童の発達や認識と照応させた指導への言及である．

また，1960年から1970年にかけて起きた教育内容の現代化に関わり，系統的な指導が模索されるようになったことで，体育でも系統的指導に関わる議論がされるようになる．そんな中で学校体育研究同志会も「運動文化の特質を踏まえながら系統的に指導していく必要」と同時に「身体活動としての喜びを技術習得と併せて感得できるように指導していくことが重要」であるという体育観を打ち出していく（学校体育研究同志会，1974）．すなわち，スポーツ独自の面白さや楽しさを味わうためには，その文化の中核を形成する技術を習得することが重要であるという立場をとっている．このような指導観を基に，その叢書である『体育実践論』の中では運動文化を教材とするためには，その本質的課題を指導する必要があるとし，「技術的特質」という概念を提唱した（同上，1974）．そこでは「運動文化（教材）の基礎技術を明確化するために，それぞれの教材特質を技術的観点から把握しなおす必要があると考えている」と述べている（同上，1974）．また，学校体育研究同志会（1974）によれば球技の特質は「非常に原則的に述べるならば，それぞれの球技の『得点様式－形式と方法（内容）』に集約されている」という．そして，球技においては単独のプレーのみでは競技が成立しないことを背景に「コンビネーションを含むシュート」が球技の「技術的特質」とされている（同上，1974）．

以上のように，学校体育研究同志会は体育科において運動文化を指導対象とすることで，教科としての存立基盤を形成し，その本質を探究することを推奨してきた．その概念として「技術的特質」を提示し，運動文化を見通す技術の特定を目指している．

３－２．先行研究におけるサッカーの面白さや楽しさに関する言及

先に「技術的特質」が運動文化を見通す技術的内容であると指摘した．それゆえ，サッカーの技術的特質を特定するためには，その競技を貫く要素を特定する必要がある．競技を貫くものとして，伊藤・竹田（2008）はサッカーの歴史的発展に着目している．彼らはサッカーの歴史的発展における変化には「フリースペース」が関わっていることをシステムの発展から導き出した．そして，サッカーの「技術的特質」を「システムにおける自分の役割の認識と，フィールド上において相手からプレッシャーを受けず自由にプレーすることのできる『フリースペース』の奪い合い」と規定した（伊藤・竹田，2008）．

このような「フリースペース」を軸とした規定は，歴史的にサッカーは，フィールド内で守備は攻撃に圧力をかけるために時間と空間を奪うためのシステムを構築し，攻撃はプレーする時間と空間を広げるためにシステムを更新してきており，これが戦術や技術を発展させる原動力であることを伊藤･竹田（2008）は提示している．とはいえ，この規定には課題も同時に存在する．それは，「フリースペース」が生み出される要因となるルールとの関係について言及していない点である．具体的に言えば，「フリースペース」はオフサイドによって制限される空間内で発生するにも関わらず，そのオフサイドに関する言及が十分にされていないのである．ここを起点として考えなければならないのは，サッカーという競技を構成している要素がいかなる関係を有しているかということを整理しなければ，フィールドの中で起こる現象を十分に把握することはできないということである

そこで，伊藤・竹田（2008）が提起するサッカーの技術的特質に対して，佐藤・近藤（2016）はサッカーを構成する要素間の関係性が不鮮明であると指摘し，「競技構造」という概念を使って説明することを試みている．この研究における方法論は，金井（1977）が提起した身体運動過程及びスポーツ過程に関する構造論をスポーツの「競技構造」として捉えなおし，スポーツ過程における運動対象，競技主体，運動手段をサッカーに援用して，サッカーの「競技構造」を明らかにした（図１）．

佐藤・近藤（2016）はサッカーの競技構造をプレーが行われる「競技空間」，プレーをするために必要となる「運動手段」，そしてプレーを行う「競技主体」の３つに分類し，それぞれの関係を模式的に示した．そして，この整理に基づき，サッカーの「技術的特質」を「ルールによって制限された空間内で，時間的・空間的な状況やフィールドの特性を考慮しながら，主に足を用いて身体移動しつつ，ボールを操作し，相互のシステムに対応した技術・戦術を個人的・集団的に使用しながら試合時間内での得点を目指し，攻防を展開すること」と規定した．

この規定では，サッカーのプレーは多様な要因が絡まり合いながら「競技空間」内に現象していることを示している．そして，相手のシステムや自分たちのシステム，身体運動，ボール操作を目の前に状況に即して，プレーヤー（競技主体）が最適なプレーを選択することの重要性を明らかにしている．このような複雑な現象をLebed（2006）の言葉を借りれば「コンプレックスダイナミカルシステム（complex dynamical system）」となり，競技主体が行うプレーの背後には多様な関係性が含まれているのである[2)]．さらに，この規定で注目すべき点は，「運動手段」にルールを示している点にある．「運動手段」は競技空間内で現象する運動様式を規定する．つまり，ルールによってサッカーのプレーは形づくられるのである．すなわち，眼の前で繰り広げられるプレーの連続性の集合体がサッカーと認識できるのは，ルールによって規定された範囲内でプレーが行われているからである．そして，その逸脱には厳罰が与えられる仕組みを持っていることからもサッカーがサッカーたらしめるものの一つとして，ルールの存在が大きく関わっていると言えよう．

以上のように，サッカーの競技構造を構築する際に，競技主体や競技空間を規定するルールも含めて競技の全体像を把握することの重要性を指摘したが，球技の中でもサッカー独自のルールとして「オフサイド」がある．この「オフサイド」ルールの存在は，目に見えないオフサイド・ラインがサッカーのゲーム中におけるプレーヤーの技術や戦術に多大なる影響を与えていることを意味し，サッカーの独自性を明確化する上で，その検討は欠かすことができないと考えられる．そこで，オフサイド・ラインについて「最大防御境界面」という概念を用いている鈴木ほか（2003，2010）の研究を用いてサイドの戦術的な面を明らかにする．

鈴木ほか（2010）が提唱する「ゲーム構造論」は球技の指導が公式なスポーツに近づけていくという枠組みになっていることを問題視し，それぞれのゲームにおける競争課題を分類し，その課題に応じた中身を学習する指導方法を提起している．そこでは，従前の球技の分類論が競争目的の視点から分類されていないことを指摘し，新たな分類を提示している．分類の視点は，ａ．ボールを何らかの仕方で目標地点（相手方のゴール，エリア，コート，あるいはターゲット）に移動させることを目的としたゲーム，またはｂ．ボール操作を契機にプレーヤーが目標地点（ホームベースなど）に移動することを目的としたゲームであるか，その競争に際してボールがｘ．１個のボールを係争物とするゲーム，またはｙ．プレーヤー全員に一個ずつボールが与えられるゲームであるかという点から分類できることが鈴木ほか（2003）で示されている．この組み合わせからみたサッカーはａとｘを組み合わせた「突破型のゲーム」となる（表１）．

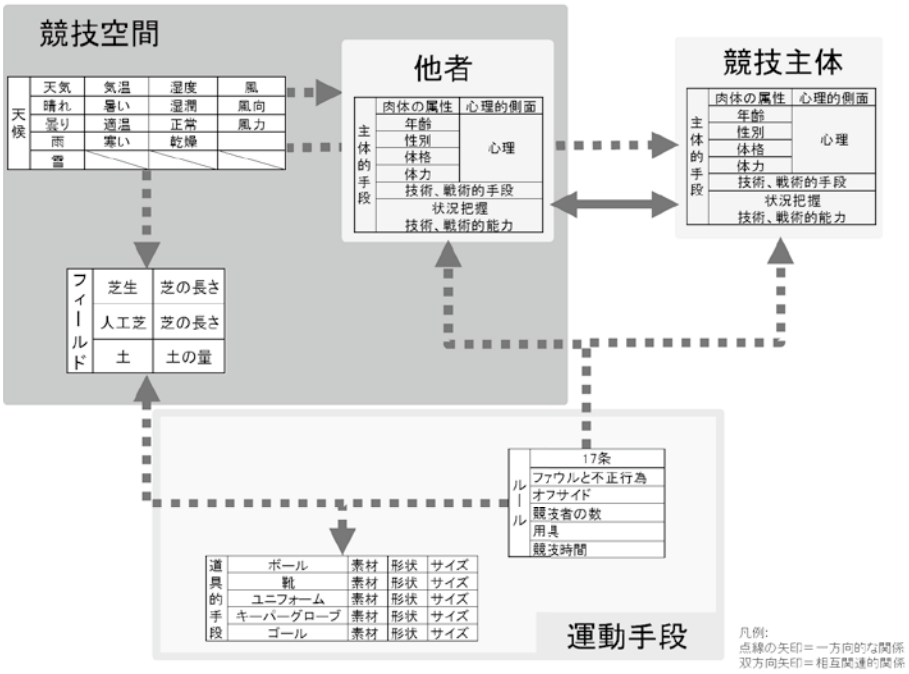

図１　サッカー競技構造（佐藤・近藤，2016，p.37より引用）

さらに，鈴木ほか（2003）は突破型のゲームに関する競争課題について言及している．その中では，ボールの移動を企てる攻撃とそれを阻む守備とで構成される「防御境界面」の質的な差異があるとし，表２のように分類している．その中で，サッカーの「最大防御境界面」はオフサイド・ラインにあることを示している（鈴木ほか，2003）．また，このラインを突破するためには，「自分へのPass」というドリブルやシュート，味方へのパス，が必要となる．それゆえ，「最大防御境界面」として規定されるオフサイド・ラインがあることはプレーヤーに戦術的なプレーを要求することに繋がると理解できる．

４．考　　察

伊藤・竹田（2008）はサッカーの歴史的発展過程を分析したことによって「フリースペース」という概念が技術や戦術の根幹を担っていることを示している．また，佐藤・近藤（2016）は相手のシステムや自分たちのシステム，身体運動，ボール操作を目の前に状況に即して，最適なプレーを選択することが複雑で未確定なゲームにおいて重要であることを示している．しかし，これらの研究成果で明らかにしていた内容は，あくまでもフィールドのプレーについて言及しているだけであり，プレーする場の特性を十分に捉えておらず，サッカーの攻撃や守備を展開できる空間がルール上与えられた仮想のライン（オフサイド・ライン）によって動的に変化することについて言及していないことが課題として挙げられる．鈴木ほか（2010）が提唱するようにサッカーには「最大

表１　鈴木ほか（2003）による球技の分類

ゲームの名称	サッカー	ゴルフ，ボウリング	野球，ソフトボール	
	バスケットボール，ハンドボール			
	アメリカンフットボール			
	ラグビー			
	バレーボール，テニス			
競争の目的	ボールを目標地点(空間)に移動させること…(a)		本塁を陥れること	
競争媒体(ボール)の個数	1　個	プレーヤーの人数分	1　個	
未確定性の発生要因	ボールを保持しない防御側による(a)の妨害	ボール操作の困難性	一次ゲーム	ボールを保持しない防御側による(a)の妨害
			二次ゲーム	ボールを保持した防御側による進塁の阻止
競争課題	防御境界面を突破すること	ボールを的に接近させること	一次ゲーム	防御境界面を突破すること
			二次ゲーム	次塁に進塁すること
〈カテゴリー名〉	突破型ゲーム	的当て型ゲーム	進塁型ゲーム	

表２　突破型の競争形態

		サッカー	バスケットボール ハンドボール	アメリカンフットボール	ラグビー	バレーボール テニス
最大防御境界面*1	名称	オフサイドライン	Defense の最終ライン	スクリメージライン	オフサイドライン	ネット
	決定方法	Defense player の位置	Defense player の位置	ボールの位置	ボールの位置	Default
	変動・固定	変　動	変　動	固　定*2	変　動	固　定
防御の層構造化の方向*3		最大防御境界面の前方	最大防御境界面の前方	最大防御境界面の前後	最大防御境界面の後方	最大防御境界面の後方
突破の方法		Pass*4	Pass*4	Carry Pass*4	Carry Pass*4,*5	Pass*4

*1 競争目的を達成する上で最も重要な課題となる防御境界面を示す．
*2 スクリメージラインが形成される位置は，ダウンの度に変更されるが，当該ダウンの中ではその位置は固定される．
*3 ボールを持たない側のチーム（Defense）から見た方向を示す．
*4 プレーヤーがボールを身体から離脱させるすべての行為を「Pass」とみなす．シュート（ゴールへの Pass），ドリブル（自分への Pass）も含まれる．
*5 キックを用いる場合に限定される．

防御境界面」としてオフサイド・ラインが存在し，そのラインがプレーヤーに戦術的な行動を要求する側面があった. このゲーム中における仮想ラインの動的変化が，他のゴール型に分類されている球技種目と決定的に異なる．バスケットやハンドボールではプレーするコートにルール上の制約としてプレー空間に侵入する制限が設けられている[3)]が，サッカーには守備者のラインにルールが設定されている．そのため，常に攻撃可能なプレーエリアが動的に変化する仕組みを持っている．より具体的に言えば，100m×64mというフィールドの横幅は最大限使用できるが縦方向のプレーエリアはゴールの位置は変化しないにもかかわらず，守備者のラインによって動的に変化するのである．この動的なラインは，ボールの位置によっても変化する．オフサイド・ラインを担う守備者の位置よりも攻撃方向にボールが進行した場合はボールがオフサイド･ラインへと変化する. この点にサッカーのプレーフィールドの独自性が表れている.

さらに，クリス・アンダーセン・デイビッド・サリー（2014）はサッカーの「ピッチで起きることの半分は運である」と述べている. この点はまさに複雑系科学とサッカーのゲームの関係性を言い当てている．加えて，クリス･アンダーセン･デイビッド･サリー（2014）は「サッカーはゴールという稀な出来事と，そのゴールを生み出すまでに生じる大量の動きやプレー（タックル，パス，ロングスローなど）で特徴づけられる」という．ここにもサッカーらしさがある．攻撃者はプレーするための時空間の創造を絶えず行い，守備者は絶えずその行為を阻害する．そして，この行為はフィールドにいる全てのプレーヤーがシステムによって接続されているからこそ，難解さが生じる．併せて，プレーする人間の身体的状況や精神的状況も絶えず変化し続ける．このような中でシステムの崩壊，新システムの創発，そのダイナミズムによる自己組織化が絶えず行われているのが，サッカーというスポーツなのである．こういったプレーの複雑さもサッカーの面白さとして考慮する必要があるだろう.

上記のような特徴もサッカーの特性であることを考慮すると，「技術・戦術的特質」を規定するためには，１つはゴールを目指す過程におけるプレーに潜んでいる複雑さに関する記述と，そのプレーが生み出される動的なフィールドを生み出す眼に見えないオフサイド・ラインについて記述することが必要となる．特にプレーフィールドが仮想のオフサイド・ラインによって，動的な時空間を創り出していることは，プレーの複雑さにも多分に影響を与える．それゆえ, 目に見えない仮想的なライン，すなわち，「オフサイドという仮想のラインによって規定されるプレーフィールド」という土台が存在することによって，初めてサッカーのプレーが可能となる．そのプレーにも眼に見えない部分に複雑さが存在するというのがサッカーの技術・戦術を発展させる原動力と思われる．したがって, 本研究では, 次のようにサッカーの「技術・戦術的特質」を規定したい．サッカーの「技術・戦術的特質」は「オフサイドという仮想のラインによって規定されたプレーフィールドの中で，複雑に攻防し続けること」とする.

５．まとめ

本研究では体育における戦術学習が抱える課題である文化に関する言及を学校体育研究同志会が提唱してきた「技術的特質」という概念から明らかにしようと試みた．その際，戦術というものが主流となる現在の指導方法との接合するために，「技術的特質」に戦術の概念を組み込んだ「技術･戦術的特質」として検討を進めた．そして，「技術・戦術的特質」を検討するために，サッカーの面白さや楽しさについて言及している研究を対象とし，その成果と課題について検討した．その結果, オフサイド･ラインにサッカーの独自性があると考えられた．オフサイド・ラインは眼に見えるものでは無く，仮想のラインによって規定されており，ボールや守備者の位置によって変動する．それゆえ，プレーを発現させる土台となるフィールドは動的な性質を有していると考えられた．また，そのフィールドで行われるプレーには，攻撃者による創造的な時空間の拡張，守備側によるその空間の縮小によって多くの要素が絡み合うという複雑さが内包されている．この点にも，サッカー独自の面白さや楽しさが存在していると考えられた.

以上の検討に基づき，本研究ではサッカーの「技術・戦術的特質」を「オフサイドという仮想のラインによって規定されたプレーフィールドの中で，複雑に攻防し続けること」とした.

６．今後の課題

本研究が提起したサッカーの「技術・戦術的特質」を基に実践を生み出していくためには，サッカーの技術・戦術の体系的な整理がなされなければならない. つまり，「複雑に攻防し続けること」の内実を構造的に描き出さなければならない.

上記したものが研究の進展に関する課題であるが，もう一つ考えておかなければならないのは，サッカー文化を解明することである．今回，サッカーの「技術・戦術的特質」としてオフサイド・ラインに着目したが，あくまでも技術や戦術と関わって，その重要性を主張したに過ぎない．体育が文化を学習者に教授する教科であるならば，技術や戦術という観点だけではなく，文化という視点からオフサイドの意味についても触れる必要があるだろう．この点を含んだサッカーの「文化的特質」を提起することも今後の課題となる.

注　記

1）現在では攻撃と守備の入れ替わりに着目された「じゃま･じゃまサッカー」や則元が提唱する「Ⅲ層構造」とったものが提起されている(学校体育研究同志会，2012).

2）Lebed（2006）によると，競技者は「スポーツ組織」との関係性をも含み込んだシステムによってプレーしているという．加えて，システムはコーチが決定するが，そこにはスポンサーなどの外部から影響もあるという．このような，Lebedの論を踏まえた上で，佐藤（2017）はサッカーの「技術的特質」を提起しているが，その文章はシステムという用語の捉え方に差異があるものの，佐藤・近藤（2016）と同様の内容となっている．

3）バスケットボールでは，制限区域内に３秒以上とどまるとバイオレーションという反則をとられる（３秒ルール）．ハンドボールではシュートを打つことが出来るエリアが制限されるゴールエリアが存在する．また，ラグビーには同じくオフサイドと呼ばれるルールが存在するが，ボールを基準とした制限規定であり，サッカーとは制限規定が異なっている．

文　献

浅田隆夫（1991）日本スポーツ教育学会第10回記念大会会長講演「スポーツ教授学の課題」，スポーツ教育学研究，11（1），1-8.

学校体育研究同志会（1974）体育実践論．ベースボールマガジン社.

学校体育研究同志会編（1975）サッカーの指導．ベースボールマガジン社.

学校体育研究同志会編（2012）たのしい体育・スポーツ 2012年７・８月合併号，創文企画.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（1）．新体育50（6）：pp.492-501.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（2）．新体育50（7），pp.568-572.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（3）．新体育50（8），pp.638-645.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（4）．新体育50（9），pp.706-712.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（5）．新体育50（10，11），pp.790-796.

G.シュティラー：谷釜了正・稲垣安二訳（1980）球技戦術論（6）．新体育50（12），pp.858-866.

H.デーブラー：稲垣安二・上平雅史監訳，谷釜了正訳（1985）球技運動学，不昧堂出版.

伊藤烈・竹田唯史（2008）サッカーにおける初心者を対象とした指導理論について．北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要11，247-262.

金井淳二（1977）スポーツ技術論の諸問題．立命館大学人文科学研究所紀要25，135-137.

草深直臣（1977）わかる，できる，いきる．運動文化，12（12）：4-12.

クリス・アンダーセン，ディビット・サリー：児嶋修訳（2014）サッカーデータ革命―ロングボールは時代遅れか―．辰巳出版.

K.マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学．大修館，p.261.

Lebed, F.（2006）“System approach to games and competitive playing”, European Journal of Sport Science6，32-42.

佐藤亮平（2017）歴史文化的発展過程からみたサッカーの指導方法に関する研究―教授プログラム作成の試み―．北海道大学大学院教育学院，博士学位論文.

佐藤亮平･近藤雄一郎（2015）学校体育におけるサッカーの指導の教育内容と教材の変遷に関する一考察．北海道体育学研究第50巻，81-91.

佐藤亮平・近藤雄一郎（2016）サッカーの技術的特質に関する一考察．北海道体育学研究第51巻，33-39.

鈴木理・青山清英・岡村幸恵・伊佐野龍司（2010）価値体系論的構造分析に基づく球技の分類．体育学研究第55巻，137-146.

鈴木理・土田了輔・廣瀬勝弘・鈴木直樹（2003）ボールゲームの課題解決課程の基礎的検討．体育・スポーツ哲学研究，25（2），7-23.

高橋健夫，高橋健夫･立木正･岡出美則･鈴木聡編（2010）新しいボールゲームの授業づくり―学習内容の確かな習得を保証し，もっと楽しいボールゲームの授業を実現するために―．体育科教育別冊，pp.151-152.

高橋健夫（1997）第２章体育科の目的･目標論．竹田清彦･高橋健夫・岡出美則編，体育科教育学の探求―体育授業づくりの基礎理論，大修館書店，pp.17-40.

友添秀則（2010）体育の目標と内容，高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編，新版体育科教育，大修館書店，pp.30-38.

財団法人　日本サッカー協会　技術委員会テクニカルハウス（2008）UEFA EURO 2008 JFAテクニカルレポート，財団法人日本サッカー協会.

財団法人　日本サッカー協会　技術委員会テクニカルハウス（2010）2010 FIFAワールドカップ南アフリカJFAテクニカルレポート，財団法人日本サッカー協会.

財団法人日本サッカー協会　技術委員会テクニカルハウス（2012）UEFA EURO 2012 JFAテクニカルレポート，財団法人日本サッカー協会.

財団法人日本サッカー協会　技術委員会テクニカルハウス（2014）2014 FIFAワールドカップブラジルJFA

テクニカルレポート，財団法人日本サッカー協会.

〔平成31年４月２日　受付
令和元年７月31日　受理〕